はなしのタネ

The Garden City つなぐ、守山

＊緑の葉と水の雫をモチーフにした守山ブランドのロゴマークです。
小さな活動が種となって、大きく育つ「守山」をイメージしてタイトルをつくりました。

中学生民謡家が全国コンクール金賞

自由な即興演奏が津軽三味線の魅力 ジャンルを越えて力強い演奏を

市内在住の中学生、多田（ただ） 智大（ちひろ）さんは、4月に東京で開催された、津軽三味線コンクール全国大会 中学生の部（独奏）で、金賞（最優秀賞）に輝きました。

祖母の影響で小学1年生から民謡を始め、めきめき上達して周囲を驚かせました。プロの民謡家になりたいと毎日練習に励んでいますが、湖国を出て東京でのコンクールに挑戦するのは2回目だったそうです。

多田さんは「譜面はあるけど、即興で自由に演奏できるのが津軽三味線の魅力です。同じ『津軽じょんから節』を弾いていても、その演奏は一人ひとり違います。東京に行ったことで、自分より上手な演奏に刺激を受けました。中学校最後の年に金賞を取れて良かった」と話していました。

多田さんは、今年開催される「びわ湖吹奏楽フェスタ」にも出演を予定しています。吹奏楽とはまた違った魅力を観客に届けたいと、意気込んでいます。

佐川美術館 ― アートコラム㊾

どんなピカソがお好みで？

佐川美術館
主任学芸員：馬場（ばば） まどか

ピカソといえば、子どもが描いたような抽象的なタッチの絵をイメージする人が大半だと思います。「これなら自分にも描けるよ」といったフレーズも、一度は耳にしたことがありますよね。それほど世界的に有名なピカソですが、彼が天才と言われるゆえんは、単に奇抜な絵を描くからという理由ではありません。

14歳で画家としてデビューし、91歳で生涯を閉じたピカソの長い画業を振り返ってみると、幅広いジャンルの作品を手掛けていたことに驚かされます。

今でこそ、ピカソといえば奇想天外の絵を描くイメージですが、実は少年期には伝統的な形式にのっとり、アカデミックな絵画を描いていました。貧困だった青年時代、常に孤独や悲しみの中にいたピカソは、ブルーグレー調の色彩で貧しさと絶望を描き出します。ほかにも、立体の表現方法を究明したキュビスムを創始したり、絵画だけでなく彫刻や陶芸にもチャレンジしたりと、その作風は多彩を極めています。これほど多くの作風や技法にチャレンジした作家は、ほかに類を見ないことでしょう。その一つ一つを会得し、作品を制作するピカソ。彼が天才と言われる理由はそこにあります。

今展では初期から晩年までの作品を、ピカソが生涯通して熱心に取り組んだと言われる版画作品を中心に振り返ります。親友、恋人といったさまざまな人との出会いと別れ、スペイン内戦などのあらゆる事象に影響を受けて制作されたピカソ作品の中から、自分の琴線にふれるような、お気に入りを見つけていただくのも面白いかもしれません。皆さまにとって「気になる」作品との出会いがあれば、うれしい限りです。

※開館情報につきましては、ホームページでご確認いただくか電話〔☎(585)7800〕でお問い合わせください。